

5―せめて間仕切りカーテンを

施設において、入所者のプライバシー保護の居住性と不慮の事故に備えての管理性との調和を計ることは難しい。ある施設では、居室の両側壁部分を除くほかの二面を全面透明ガラスにしていた。金魚槽そっくり。ある施設はもっと徹底している。中央廊下に立つと、左右前後全居室が一眺に収められる。つまり、中廊下側の腰壁がないに等しい。医師理事長の苦心の設計と説明、増築予定部分も同じ型とのこと。私は驚いて、「止めたがよいですよ。居住性を大事にしなさいよ」と言った。後日、私の意見は採用されたことを知った。

お年寄りにプライバシーはないという発想が設計上余りにも多すぎる。とくに医師主導にその傾向が強い。昨年九月十六日のNHK放送のある特養紹介画面で、露天風呂、日本庭園、乗馬までありながら、居室には間仕切りカーテンがない。見てくれだけでは偽善になっていく。お年寄りの終の住み処には温かい自分だけの場所が用意されたいものである。貧しい私たちの施設は、せめて間仕切りカーテンでそれを確保したいと思う。カーテンは壁である。



「任運荘」(46号)で、カーテン必置を訴えた。毎日(62・11・24)でこれが紹介されたので、私たちに具体的な反響が寄せられ始めている。

最低限度の気配り

日本の福祉施設、わけでも特養ホームでは、静養室を除けば、ふつう個室はよいされず、雑居部屋である。福祉施設を「生活の場」というなら、せめてカーテン仕切りで、最低限のプライバシーが守られていなければならない。そうでなければホームとはいえない。

設備も新しく、経営も意欲的なあるホーム。しかし、ここにもカーテンはない。園長はカーテンをしない理由を積極的に説明される。「同じ部屋にいるお年よりは、皆運命共同体です。きょうだいです。カーテン仕切りは断絶をすすめるようなものです。私はぜったい反対です」。アカの他人どうしの集団生活をきょうだい同胞と、一方的に決めてかかっている。ああ、大家族主義的管理主義。思いがけない考えに、私は黙ったまま辞去。

お年よりに、「カーテンがほしいですか」と聞いても、きまったように「いらぬ」と答えるだろう。園への遠慮があるから。かりにカーテンを用意していても自分から引いて仕切ろうとはしないだろう。隣人、ひとさまへの遠慮から。任運荘でも初めはそうだった。引くことが当然ということ、園側が手伝ってあげねばならない。そうすれば、カーテン活用がかんたんに定着し、カーテンなしの雑居部屋はとて耐えられないものになる。

国や県の監督指導がカーテンには何の関心も示されていないのは、ホーム生活の現状を、心に考えていないからである。そうであり続けている限り、いうところの「生活の場」は空念仏にすぎない。

カーテン設備をしておっても、すっかり外してしまっていたり、レール上にたくし上げたり、締めても一定の所で止まって大きくすき間が残るようにしていたり、長いもの短すぎるもの、さまざまである。

任運荘はふつう、昼間仕切る人は少なく、三人ていどが随時開閉する。夜は全員。しかし、夏分は暑苦しいので、意思表示のできない人には開けてあげる場合が多い。排泄介助やおむつ交換時には例外なく厳密に仕切られる。

▼お年よりの意見

良い時と悪い時があります。良いのは大小便の出る時です。悪いのは暑苦しい時です。

落ちて着いて自分一人の室となりますし大小便はもちろん、着替えの時うれしく思います。

秦　タカオさん

姫野ハル子さん

カーテンは戸締まり同様です。

河原茂一郎さん

夕食後部屋に帰り、ベットに寝かせてもらい、寮母さんがカーテンを引いてくれると、ホッ

として我が家に帰った思いです。

衛藤フサエさん

部屋で便器で用達ししていれば丸見えです。また、おむつを換えているところを見せたくもないが、人のも見たくない。カーテンあってこそです。夜も氣を楽に休まれます。

羽田野モモエさん